

令和3年(2021年)8月初旬の日暮れ前、武蔵小金井駅から小金井街道に沿って帰宅する途中、街道に面した小金井公園の垣根に落とし物の白いハンカチのようなものが視界に入った。近づいてよく見ると、羽化直後の大型の白い蛾であった。家に持ち帰って調べると、名前はオオミズアオ蛾で、成虫の開帳は8cm~12cmで絶滅危惧種2類(注)とある。その蛾は羽化直後なのに9cmである。虫籠の中の蛾を写真に撮った後、ベランダの植木の葉にそっと休ませた。翌朝には姿はなかった。蛾は夜行性なのに未だ明るい日没前に蛹から羽化してしまったのは、蛾として失敗だったが、私にとっては良い勉強の機会となった。



絶滅危惧種のレッドリストを調べると、1A類と1B類には一般に知られている虫名はほぼ見当たらない。これは棲息地が一箇所しかないとか、島嶼などの厳しい環境下にあつて少しの環境変化で絶滅しかねないものが分類されているからだ。例えば、地名の付いたクメジマホテル、ヤンバルテナガコガネなどである。2類になると、タガメ、ゲンゴロウ、ギフチョウ、オオクワガタなどが分類されている。子供の頃、田圃の水路で網をひと掬いすると、何匹も獲れたタガメ、ゲンゴロウが2類に分類されているのは、これら昆虫が信じられないほど減少した証左である。

レッドリストが作成される前、子供の頃は昆虫が減るなどとは、寸毫も考えられなかった。昆虫は繁殖力が旺盛である。卵から羽化するまでの間、更に成虫になっても鳥類や他の生物に捕食される。しかし、造化の妙で餌食になっても多勢の子孫、種を残すように創造されている。そんなことで、昆虫が減少するようなイメージは無かったのに、昨今は多くの昆虫がレッドリストに載るような状況になってきた。主たる原因は、「生態系を含む棲息環境の悪化」である。より具体的に述べると、次のようである。

「棲息域の狭小化」と「棲息域の分断」がある。森林伐採・開発、沼・池・草地・砂浜・水田などの減少、道路や住宅による分断による繁殖機会、餌の減少である。「環境変化」がある。農薬・除草剤による水質、大気の汚染による死滅である。「外来種との競争」がある。外来種が病気を持ち込んだり、外来種が在来種を捕食することによる死滅である。多摩のギフチョウは分断による減少の典型例といわれる。

昆虫採集は自然破壊や種の減少に繋がるという皮相浅薄な見解が弥漫しているやに見られる。あるショッピングセンターの庭でのことである。大木の根本から30cmほどに羽化直後のアブラゼミが動かずにいた。周りの子供は小枝で弄ぼうとしているが、傍に立つ若い母親は、「蝉が痛がるでしょう、死ぬよ生かしてあげてよ」と牽制している。生き物を大切にするのは結構だが、セミを捕まえたいという子供の真っ当な好奇心を悪いとして抑え込むのは、センチメンタリズムの何物でもない。セミ一匹を代償に子供の好奇心、知識欲が暢達していけば、プラス効果は大きいのではないだろうか。

卑近なところで、我々は知らず識らずのうちに、虫を殺戮している。分断された棲息域間を移動する際、高速道路の交通事故で死ぬ昆虫は全国でどのくらいだろう。採集されるものより格段に多いであろう。道路のセメント製U字溝も凶器である。落ちて這い上がれずに死ぬ歩行性の虫も多い。本人が住むマンションでは、小金井カントリークラブのゴルフ場側に面した廊下(通路)

にある浅い排水溝に落ちて飛び出せないセミ、カナブン、カメムシなどが見つかる。特に虫の活動が活発な天気の良い日には犠牲虫は多い。放ってやると感謝して飛んで戻る。全国の都会周辺マンションで犠牲になる虫は、どれくらいだろうか。昆虫採集どころではなかろう。森林伐採で気付くのはゴルフ場である。国内全てのゴルフ場総面積は、米国、カナダのそれに次ぐ世界第三位であり、国土の0.7%を占有しているという。また、コースは虫のいない都市部には勿論少なく、本来なら虫が棲息している標高500mまでの丘陵と1500mまでの低山にコースの80%が立地しているという。

地球上に約6億年前に多細胞生物が出現して以来、生物の大量絶滅は5回(恐竜の絶滅は5回目)あったが、現在は6回目の大量絶滅期に入っているともいわれている。人類は多数の種の相互作用という生態系の中で棲息している。種の絶滅は生態系の破壊となり、万物の霊長を自認している人類という種も最終的に危惧種になるのでは?日本に「生物多様性基本法」(2008年制定)があり、生物多様性の保全が「人類の生存の基盤」と定義している。

注=環境省は1992年に「野生動植物の種の保存に関する法律」を制定し、レッドリストを作成し始めた。2021年1月現在3716種の野生生物が掲載され、その内昆虫類は367種である。日本に棲息する昆虫類は約3万2000種なので1%以上に当たる。

367種の内訳

絶滅危惧種 1A類 75種(極く近い将来野生での絶滅の危険性がとても高いもの)

1B類 107種(近い将来絶滅の危険性が高いもの)

2類 185種(現状が今と変わらなければ、近い将来1A、1Bと同じくらいの絶滅の危険が高くなるもの)

参考資料

伊丹市昆虫館発行「いたこんニュース第36号」

「三人寄れば虫の知恵」新潮文庫刊

ウィキペディア